

広島大学法学部東千田移転

新棟建設 23年講義開始へ

広島大が、東広島キャンパス(東広島市)にある法学部を東千田キャンパス(広島市中区)へ移転させる方針を決めたことが24日、関係者への取材で分かった。院生を含む600人超が学ぶ新棟を建設し、2023年4月の講義開始を目指す。広島大の統合移転に伴い1995年に東広島市へ移って以来、28年ぶりの「都心回帰」となる19面に関連記事。

(田中美千子)



28年ぶり都心回帰

東千田キャンパスには現在、法科大学院や法学部夜間主コースがある。今回、昼間コース(580人)と大学院法学・政治学プログラムを移すことで、法曹養成の拠点性を高める。併せて、仕事に役立つ技術や知識を学び直す社会人向けの「リカレント教育」も強化したい考えだ。

新棟は6階建て延べ約6



法学部の移転先に決まった広島大東千田キャンパス(手前) 11月4日、広島市中区
(撮影・高橋洋史)

200平方メートル。研究室や体育施設などを整備する。既存施設も図書館を拡充するなど、改修工事を進める。

この移転に伴い、16年4月から東千田キャンパスで実施してきた医、歯、薬学部1年生約400人向けの教養教育は電キャンパス(南区)へ移す。教室を確保するため、電キャンパス内でも老朽化した建物1棟を取り壊し、5階建て延べ約3600平方メートルの新棟を建てる。一連の事業費は移転費などを除き、約40億円になると見込む。

広島大は19年5月、創立75年に当たる24年に向けた「取組構想」をまとめ、東千田キャンパスの重点強化を掲げてきた。大学間の競争が激化する中、今回の移転により広島都心部で大学の存在感を高め、魅力アップにつなげる。

併せて東広島キャンパスでも国内外の研究者や留学生を集め、グローバル化をさらに進める。米アリゾナ州立大日本校の設置が決まっており、法学部の移転後、その跡地を活用する。一連の計画は学長、理事たちが出席する役員会で決定した。近く公表する。